浩然の初期短編小説

阿頼耶　順宏

Hao Ran's Short Stories in His Early Days

Junkō ARAYA

—1—

浩然（Hao Ran）は，長編小説≪艶陽天≫や≪金光大道≫の作者として有名であるが，その創作活動は，短編小説から始まっている。

浩然の最初の短編小説集は，1958年に出版された≪喜鵲登枝≫（作家出版社）であり，これには56年から57年にかけて書かれた11編の短編小説が収められている。以後，63年までに≪苹果要熟了≫（作家出版社），≪新春曲≫（中国青年出版社），≪珍珠≫（百花出版社），≪蜜月≫（北京出版社），≪杏花雨≫（上海文芸出版社）などの短編集がひきつづき出版され，作品数は百十余編にのぼる[1]。

これらの作品で，浩然は，互助組から合作社，人民公社へと大きく変わってゆく河北の農村を舞台に，新しく生まれ出てきたさまざまのタイプの人間像を描いている。こうした豊かな創作体験の上に，1965年に完成した全3巻120数万字の長編≪艶陽天≫や，72年に第1部，74年に第2部を発表し，第3部も近く刊行の予定という長編≪金光大道≫の成立も可能であったと考えられる。そうした意味で，浩然の初期短編小説は，彼の創作活動の基盤として，重要な意義をもつものである。

63年12月に出版された≪彩霞集≫（中国青年出版社）は，これら初期の短編の中から20編を選んだものであり，さらに10年後の73年7月には，66年までに発表した作品をも含めた中から30編を選んだ≪春歌集≫（天津人民出版社）が出版された。

さらにその後，文化大革命以後の71年，70年に書かれた短編10編を集めた≪楊柳風≫（北京人民出版社，73年8月）や，青少年向けの20の短編を集めた≪幼苗集≫（北京人民出版社，73年4月）などがある[2]。浩然はこのほか，抗日戦争の時期の西沙群島を舞台に，散文詩風の中編≪西沙児女——正気篇≫（北京人民出版社，74年6月），≪西沙児女——奇志篇≫（同，74年12月）や，文化大革命後の西沙群島を舞台にした≪歓楽的海≫を発表しているし，また≪大地的翅膀≫（人民文学出版社，76年5月）では，75年後半の輝県，林県，遵化，張家口等の地区の農村や北京郊区における‘農業は大寨に学ぶ’運動のレポート10編がまとめられている。その多方面にわたる

活動はめざましいものがある。

浩然の長編小説については，これまでに小論を発表したことがあるので[3]，ここでは，人民公社成立前後の時期，すなわち1956年から59年の間において，浩然が執筆した短編小説を，前記≪彩霞集≫，≪春歌集≫からとりあげ，浩然の初期短編小説について考察し，あわせて，解放後の中国農村社会における民衆の意識をさぐってみたい。

—2—

これらの短編の背景となる中国農村における社会主義化のコースは，大体，次のように行なわれた。個人経営の農業から，農耕や副業を協同で行なう互助組ができ，それが発展して個人の土地を共有にして，計画的に経営する合作社（農業生産協同組合）となる。合作社は，各個人の提供した土地に応じて配当をする初級合作社から，土地に対する配当をやめ，労働に応じて配当する高級合作社に進み，この高級合作社がさらにいくつか合同して人民公社となる。

これについて『七里営人民公社』(北京外文出版社，75年）では，次のように述べている。

「互助組に加入した農民は，土地の私有が認められている状況のもとで，労働力や役畜，大型農具などの生産手段を互いに使用する。この互助組は社会主義の萌芽である。

初級農業生産協同組合に加入した農民は，労働におうじて分配するという原則にもとづいて報酬をうける。そのほか，私有財産としての土地は，出資の形で協同組合にわたして統一的に経営され，適当な利潤を得る。役畜や大型農具などもそれに準ずる。初級農業生産協同組合は半社会主義的性質をもつ。

高級農業生産協同組合に加入した農民は，労働におうじて分配するという原則にもとづいて報酬をうけるが，土地とその他の主要な生産手段は集団所有になり，それにたいする報酬はない。高級農業生産協同組合は完全な社会主義的性質をもつ。」

こうして，中国の農村に人民公社が誕生したのは，1958年夏のことであり，以後「わずか数か月のあいだに全国の農村にあまねく人民公社が設立され，全国の農民は7万4000余の人民公社に所属することになる[4]」のであるが，注意すべきことは，農村における水利施設の建設，機械化の推進，道路の新設，高圧電線の架設などの工事は，単独の高級農業生産協同組合の力ではどうにもならず，組合の連合と協力がどうしても必要となってきた結果として，人民公社が成立したことであり，以前は郷政府の管轄下にあった学校や商店，民兵組織などをも人民公社の指導下におかれるようになったことである。

こうした人民公社成立までの過程は，しかし決して事なく進行したのではなく，多くの農民たちのとまどいがあり，富農を主体とする反動勢力とのたたかいがあり，幹部たちの献身的なはたらきがあったことは，その後発表された各地の人民公社の記録，たとえば福建省の城門人民公社史，熱河省の麦田人民公社史，四川省新繁県新民人民公社史といつたものからも知るこ

とができるが[5]，こうした状況を浩然はどのようにとらえ，それを文学作品としていかに結晶させることができたかを，作品の発表時期にしたがって，考えていきたい。

— 3 —

1956年の作品

≪喜鵲登枝≫（かささぎ，枝にとまる）

清早，飞来了两只花喜鹊，登在院子当中的桃树上，冲着北屋窗戸喳喳地叫。（朝早く，二羽のまだらのかささぎが飛んでくると，庭のまん中の桃の木にとまって，北のへやの窓にむかってチイチイとないた。）

韓興じいさんは，にこにこしながら，かささぎを眺め，かれらがどんないい前ぶれをしていてくれるのか，と考える。ばあさんのほうは，娘の玉鳳が，朝食もそこそこに，合作社（農業生産協同組合）の仕事だといって出かけるのを見て，いらいらしている。年ごろの娘が勝手に結婚の相手を決めでもしたら大変だ。「婚姻法」というのができて，「自由」に相手が決められるというから，よけいに心配になる。じいさんがあまり気にしていない様子なので，「あんたは娘がかわいくないのか」とどなってしまう。

玉鳳の属している東方紅合作社と，林雨泉の属している青春合作社とは５キロほどしか離れていないが，間に金鶏塘河があるので，昔から縁組も少なく，行き来もあまりなかった。両方の合作社で相談して石の橋を作ることになり，その作業で玉鳳と雨泉とが知りあい，愛しあうようになる。韓興じいさんは，うわさでそのことを知る。

焦家の娘が，自由だの恋愛だのといって，つまらぬ男にだまされて，三日半で離婚さわぎを起こしたと聞くと，老夫婦は心配でならない。

青春合作社へ種子の交換に行く途中，韓興じいさんは，自転車を避けようとしてころぶ。乗っていたのは青春合作社の若者で，話しているうちに，じいさんはこの若者が気に入る。合作社について，じいさんは主任と話をしたついでに，林雨泉についてたずねてみる。会計係をしているとてもいい若者だと主任はいう。たまたまそこで知りあった林振から，食事をすすめられ，雨泉のことも聞いてみたくて韓興じいさんは林振の家を訪ねる。

林振の家で，韓興じいさんは娘の玉鳳の写真と，娘に買ってやった赤い表紙のノートを見つけて驚く。酒をのみながら，林振は韓興じいさんに，むすこがあんたの村の玉鳳という娘と結婚したいというが，どんな娘なのか教えてほしいと言いだす。

「林さん，実をいうと，韓玉鳳というのはつまりわしの娘でな，どんなことでも，遠慮せず聞いてくだされや」

林振じいさんもびっくりする。二人の老人は手をとり合い，大声をあげて笑いだす。……

この作品は56年８月，保定で書かれ，≪北京文芸≫に発表されたもの。浩然の最初の短編集の名も，この作品の題名をとっており，≪彩霞集≫，≪春歌集≫ともに巻頭作品として収めている。作者にとってたいせつな思い出もある作品なのであろう。

玉鳳はまじめによく働く，しっかりした娘で，若者たちのリーダーであるが，雨泉のことを両親にうちあけることができず，両親のほうも気にしながら，面と向かって聞けずにいる。一方の雨泉も，玉鳳の父親が来ていると聞くと，はずかしがって逃げ出そうとし，むりやり引っぱって来られると，うつむいて顔をまっかにしている若者である。父親たちも実に素朴で善良な人びとであり，単純なストーリーで自転車の若者が雨泉であったとか，その家で娘の写真をみるとか，偶然が重なりすぎる難はあるが，ほのぼのと心暖まる，明るい物語となっている。

ここに出てくる「婚姻法」は50年５月１日に公布され，中国特有の封建的婚姻制度の廃止，旧婚姻諸形態の禁止をきめ，婚姻の自由，一夫一婦，男女平等をうたっている。公布前，草案は全国の工場，農村の婦人組織団体が数か月にわたる大衆討論をし修正を加え，一年半にわたり全国の婚姻習慣，解放区の婚姻条例を調査し参考とした上で，公布されたのだという。53年９月には，これの周知徹底のための「婚姻法貫徹月間」も行なわれている。[6] 婚姻法の制定と，人民公社成立による生産・社会活動への参加によって，中国の女性は何千年来の忍従の生活から解放されたといえるだろう。

1957年の作品

≪一匹瘦紅馬≫（やせた赤馬）

焦貴は東方紅合作社の運搬員で，24，５歳の若者。馭者としての腕はたいしたもので，どんなにはげしい性質の馬でも，彼の手にかかると，おとなしくいうことをきく。

合作社では，やせたよぼよぼの馬を売って，若い馬に買いかえることになるが，市(いち)ではこの馬は二十元にしか価がつかない。焦貴は腹を立てて，売らずに戻ってくる。生産隊長の李永から，千元を足してよい馬を買えといったのに，どうして売らなかったのかといわれて，彼は答える。「こいつはまだ使えますだ，わしはええかっこうしてるんでも，見えをはってるんでもねえ，まだ使えるやつをスープの鍋に放りこんで，合作社の財産を河に投げこむようなことはできねえ，……」

焦貴はけんめいにやせた赤馬のせわをする。夜おそくまで，牧畜研究所編の小冊子を読んだり，光緒年間出版の≪牛馬経≫を読んだりするが，馬がやせた原因は，しらみであったことをつきとめ，六六六（BHC）を使って馬を洗う。

半年ののち，焦貴は丸丸と太った大きな赤馬をつれてくる。一千八百元で売らないかと声をかける人もいる。それがあの，二十元にしか価のつかなかった赤馬だった。

「まっかなたてがみ，まっ黒な眼，額に垂れた赤いふさがひらひらしている。太った尻のうし

ろでは，長くてぴかぴかしたしっぽがゆれている。四本の脚は，まるで石の柱のようだ，……」

無計画に合作社の金を浪費した生産隊長の李永はやめさせられ，焦貴は模範社員となり，運輸隊長になる。(57年1月31日，北京で執筆，≪火花≫に発表。)

この作品では，社会主義的自覚をもつ者によって，はじめて社会主義の事業ができることが強調され，生産隊長の李永は「資本主義思想が頭にいっぱいつまった坊ちゃんで，運輸隊をめちゃくちゃにした」として免職になる。物語は，作者らしい人物が合作社を訪問するところから書きはじめられ，焦貴との出会いや，焦貴を助ける義務文化教員の桂栄，焦貴と同じ運輸隊のしごとをしながら，焦貴とは対立していた福慶，合作社主任の蕭永順らの人物をえがき，構成に苦心のあとがみえる。やせ馬を助けるために，馬と一緒に黙黙と重い車をひく焦貴によって，合作社を支える労働模範の姿をえがいている。

浩然は短編をまとめる結びのことばがうまい。この作品は福慶の次のことばでおわる。

"梁同志，还有件事我没告诉你哩，焦贵前三天跟桂荣结婚了，你去闹新房还不算迟。"(梁さん，わしはまだ言ってなかっただがな，焦貴は三日前に桂栄と結婚したよ，ふたりのへやに押しかけてひやかしてやっても，まだいいよ。)

≪新媳妇≫(新しい嫁さん)

梁家に新しい嫁が来てから，近所では大騒ぎだ。おかみさん連中は，「梁の息子は，外からとんでもない厄病神をつれこんだ」とあきれてしまう。

渤海湾一帯の村では，嫁入してから三日間は，みんなで夫婦のへやに押しかけて，からかう習慣がある。嫁の鼻にとうがらしの粉をかけたり，頭から水をかけたりする所もある。こうしておけば，嫁はおとなしくなり，使いやすくなるというので，花嫁がひどくやられるほど，主人は喜ぶのである。梁おじさんはおだやかな人だし，息子の河南は県の青年団の幹部で，自由恋愛でみつけてきた嫁だから，ひとつうんと祝ってやろうと，人びとは，いばらや毛虫やとうがらしの粉を準備して待ちかまえていた。

結婚式の夜，たくさんの人が庭に集まり，わいわい騒いでいた。こういうとき，ふつう花嫁ははずかしがり，こわがって，炕の上に坐り，うなだれ歯をくいしばって，されるままにしているものなのだが，この花嫁はちがっていた。人びとがはいってくると，ポイと炕からおり，にこにこしながらおじぎをして彼女はいう。「みなさん，どうぞ炕に上がってください。これからは同じ合作社の人間で，一緒にくらし，一緒に働くのですから，同じ家のものです。わたしは来たばかりで，何もわかりませんから，どうかみなさんよろしくお願いします。どうぞおかけになってくださいよ，さあ！」

彼女の母親は，彼女が十歳のとき，二人の八路軍幹部をかくまっていたのを密告されて，父

親と一緒に秦皇島へつれていかれて殺された。それから彼女は兄嫁とくらしたが，共産党員である兄嫁は，彼女に新しい社会に生きる女性としての教育をしてきた。

嫁にはできるだけ多く家のしごとをやらせて，外へでるひまがないようにするのがよいと人から言われて，河南の母親はそうさせようとするが，彼女は，父親と一緒に働きに出るから，家のことはおまかせしますという。母親も，おろおろするばかりだ。

しかし，村の若い女たちは，花嫁が古いしきたりに反抗してくれたことを喜ぶ。嫁入りの翌日にもう共同作業に出た彼女は，作業点数に男女の差別があるのを知って，生産隊長と争う。中農の黄全宝がずるくて，いいかげんな作業しかしていないことを知ると，彼女は会合で彼を批判する。舅はおとなしくしていない嫁をしかるが，自分のことだけを考えて，集団の利益を考えず，古いしきたりを守っていては，社会主義をやっていくことはできない，と彼女は言いきる。

夫はほかの土地へ働きにいっており，両親に自分の気持がわかってもらえないのに彼女（恵栄）は悩む。夜中に父親が高い熱を出すと，彼女は遠くまで暗闇の中を駆けて医者を呼びに行き，朝がたまでかいがいしく看病したあと，作業に出ていく。批判されて恵栄をにくんでいた黄全宝が，畑で柳の切り株で足をついてけがしたとき，彼女は自分のシャツを裂いて傷口をくくり，彼を背負って帰る。医者の手当を受けたあと，全宝は恵栄の手をにぎりしめて泣きだす。

結婚してから一か月，夫の河南が帰ってくる。河南は一か月しても恵栄が両親に気にいってもらえなければ，彼女を自分の勤務地へつれていく約束を両親としていた。見ると，母親は恵栄を休ませようとし，恵栄は母親をいたわりながら，一緒に食事の準備をしている。息子から恵栄をつれていこうかと言われた父親はいう。「わしらは年より夫婦で，お前はいつも家にいてくれないのに，この嫁をわしらからひきはなすつもりか」(1956年保定で草稿，1957年5月30日，京郊北蜂窩で改稿，≪芒種≫に発表)

農村の集団化，社会主義化が進められる過程で，必然的に起こらざるを得なかった古い意識と新しい意識との矛盾，衝突は，とりわけ中国農村においては，それのもつ余りにも古い体質のゆえに，想像できぬほどの激しいものであったに違いない。忍従の生活を一方的に強いられてきた中国女性の解放された姿を，洛然はこの作品で描いている。

長年の間，牢固として抜くことのできなかった「家」の観念，嫁と舅，姑の問題，「村」のきまり，それらを辺恵栄（辺は姓，中国では結婚しても姓はもとのままである。）は打ちやぶっていく。しかし，彼女は決して気のつよいだけの女性ではなく，心やさしく，しっかりした考えをもつ女性であることがわかると，村人たちは彼女をうけいれ，両親も彼女を離そうとしなくなる。この彼女を暖かく見守っていたのは，離れた土地で働く夫であり，矛盾を感じながら口に出せないでいた婦人たちであったが，両親にも理解してもらえず，ひとりの夜を迎える

彼女をやさしく包むのは，静かな農村の夜の自然であった。農村に生まれ，農村を愛する浩然の自然描写は美しく，作品に深い味わいを添えている。

夏天的深夜，清凉、安静，西坠的月亮给东边那棵白梨树叶镀上一层金黄。缀在枝梢上半熟的梨子，象是翡翠雕刻的一样光洁，美丽。窗前的桂花，送来一阵阵的清香。（夏の夜ふけは，涼しく，静かだ。西の空におちた月が東がわの白梨の木の葉を金色につつむ。枝にちらばるまだ熟さぬ梨は，まるで翡翠の彫刻のようにきらめいて，美しい。窓の前のもくせいの花が，すがすがしい香を送ってくる。）

恵栄の激しい心の動揺をやさしくいたわるようなこうした自然描写が，さりげなく挿入されているあたり，作者のたしかな腕を思わせるが，これは彼の作品が，単なる新社会宣伝のためのものにならず，幅広い人びとから歓迎される理由の一つでもあろう。

≪雪纷纷≫（雪降りしきる）

生産隊の婦人の会合で，五保戸（食・衣・燃料・教育・埋葬費などの保障を受ける身よりのない人の家）の世話について話し合われたとき，多くの人が我先に孤児やおばあさんの世話を申し出たが，許じいさんを引受けようという者がない。そのとき，わたしにさせてくださいといいだしたのが沈紅芳である。

沈江芳は十九歳になったばかりだが，結婚している。彼女が十歳のとき両親が死に，そのあと政府の救済をうけ，互助組や合作社に世話をしてもらった。万存のおかみさんは，紅芳の兄嫁だが，嫁に来たばかりの紅芳が，夫に相談せずにこんなことを言いだしたことを心配し，腹をたてる。紅芳はよく仕事をする女だが，許じいさんなどを背負いこんだら，家のしごともできなくなるではないか。

許じいさんは七十何歳，一生苦労をしてきて今はぜんそくもちだ。以前には，じいさんのすこしの土地に目をつけて，世話をしに来ていた姪も，この二年ばかりは，むこうのくらしがよくなったのか，忙しいのか，さっぱりやってこない。高級生産合作社になってからは，土地による配当がなくなり，働けなくなったうえに病気がちの許じいさんは悩む。五保戸の政策で，くらしの必配はなくなったが，毎日の生活では不自由なことも多い。

寒くなってまた病気がおこり，一晩咳きこんでいたじいさんは，朝になって，雪を掃く音がし，はいってきた紅芳をみておどろく。紅芳は，「東隣の万華のところへきた嫁だが，合作社からお世話に来た。同じ合作社の人間なのだから，わたしを娘とおもってくれ。」という。

紅芳说着话儿，留神看看这个屋子，只见炕上地下，真是脏的没处落脚。柜上的尘土有铜钱厚，窗戸纸儿坏了，堵着个破帽子，风卷着雪片，还是不住地从小洞往里灌……（紅芳は話しながら，このへやをよく見てみると，炕の上も土間も，きたなくて足のふみ場もない。戸棚の上の埃は銅銭の厚さほど積もっているし，窓の紙は破れていて，穴のあいた帽子でふさいであるが，

風が雪をまきあげて，たえず小さな穴から中に降りこんでくる……)

彼女は老人に話しかけながら，かまどに火をつけ，洗いものをし，中も外も掃除をし，うどんをつくって食べさせる。ふとんがひどく汚れているのをみると，嫁入りにもってきた新しいふとんをもっていって，老人のふとんをもち帰り，ふとん皮を洗い，綿をうちほぐす。許じいさんは，すっかり新しくなったふとんをなでながら涙をながす。「わしはこんなやわらかいふとんをしいてもらったのは生まれて初めてじゃ。」

万存のおかみさんは，紅芳がいそいそと許じいさんの世話をするのをみると，彼女をこまらせようとする。病気のふりをして，うどん汁をつくれだの，すいとんをつくれ，おかゆをつくれと叫び，紅芳がつくって食べさせようとすると，いちいち文句をつける。粳米（うるち米）と緑豆のおかゆをつくると，土間に投げすて，あわのおかゆがたべたいのだとどなりつけ，よそのとしよりの世話を喜んでしながら，わしにはこれぐらいのことしかしてくれないのか，という。紅芳はとうとう我慢ができなくなり，「よその人の世話は自分からのぞんでやっている義務です。あんたの束縛はうけません。わたしにだって，こうする権利はあります！」という。

二日めに夫の万華が帰り，ねえさんのいうことなど気にするなという。夜中にじいさんの病気が出たらどうしようと心配する紅芳は，家までひもを引いて鈴がなるようにするしかけを思いつく。万存のおかみさんは，義弟にさんざん紅芳のわるくちをいったので，夫婦げんかになるのを心待ちしていたのに，笑い声がきこえてくるので驚く。庭に雪をふむ音がし，万華が土塀にまたがり，紅芳が下に立ち，二人で忙しそうに何かしている。万存のおかみさんは，あきれて，「阿呆なやつらが！」とつぶやく。(56年7月，保定で初稿，57年7月，京郊北蜂窩で改訂，≪長春≫に発表)

新しい社会に育ち，両親亡きあとは合作社の人びとによって育てられた若い嫁，紅芳の生きかたと，自分の家のことしか考えず，よその世話まで引受けるのは，ばかなことだとしか思えない万存のおかみさんの生きかたとを対照させて，人びとのためにつくす若い世代の姿を描きだしている。紅芳の目には，許じいさんの姿は，一生働き通して，新しい時代をあとに残してくれた亡き祖父の姿とも重なっているのである。

这位老人，跟她死去的爷爷多么相似呵，那个弯驼的腰背，那撮黄胡子，那一双慈祥的眼睛，她都觉着很亲切。她的爷爷是个勤劳的老人，这一辈子流下的汗水和心血，给下一代创造了许多宝贵的财富。她尊敬爷爷，她爱爷爷。爷爷病倒在床上，她一再劝说万华推迟了结婚日期，直到把老人扶持入了土，她才嫁过来。全村谁不赞叹！可是这个老爷子，没儿没女，更没有一个像自己这样的孙女儿，他是多么需要人照顾，而照顾他的人，再也找不到一个比自己更合适的了。(この老人は，なくなった祖父となんと似ているのだろう。そのまがった背中，黄色がかったひげ，

あのやさしい眼，すべてに彼女は親しみを感じた。彼女の祖父は働きものの老人で，その一生に流した汗と心づくしが，次の代に貴い財産を創り出させてくれたのだ。彼女は祖父を尊敬し，祖父を愛した。祖父が病気で倒れると，彼女は再三，万華に結婚の日どりをのばしてもらい，老人を葬ってから，はじめて嫁に来たのであり，村中みんなからほめられた。だがこのおじいさんは，息子も娘もいず，自分のような孫娘もいない。どんなに世話をする人が必要なことだろう。そしてこの人を世話するには，わたしよりふさわしい人はほかにはないのだ。）

こうした紅芳のやり方が気にくわず，なんとかしてやめさせようとする兄嫁は，よそのことなどかまっていられなかった苦しい時代を生きてきたために，自分の家のことしか考えられぬ悲しいさがが身についた世代の女性なのである。彼女を最後まで紅芳のやり方を認めようとしないままにしたことが，かえってこの作品のリアリティを高めている。農村の集団化，社会主義化の過程で，新旧の思想が対立し，農民の意識変革がおこなわれるという図式は，この時期の他の作家にもよく見られるものだが，浩然の作品ではそれぞれの人物描写が生き生きとしていて，無理なくまとめられている。

≪夏青苗求师≫（夏青苗の弟子入り）

羊飼いの杜俊峰は五十七歳で，七歳から羊飼いを始めたという。どんなにやせた羊でも一か月たたぬうちに太るし，どんな病気にかかっても原因をさがしてなおしてしまう。大学出の獣医まで遠くから教えを乞いにくるほどだ。

夏青苗は中学を卒業し，羊飼いのしごとを習おうと，はりきってやってくるが，杜さんは歓迎しない。朝から晩まで羊を追って，風の日も雨の日も，山から山，野から野へとかけまわるしごとは，遊び半分でできるものではないから，ほかの生産隊へいったほうがよいと，にべもないあいさつだ。

学校で農業生産に参加する教育がくりひろげられたとき，学生会委員だった青苗は，農村の社会主義建設に参加しようと学生たちによびかけていたが，自分自身は農学院にはいって学者になりたかった。青苗の父は専員（省の下にある専区の指導幹部）だが，農村にはいる決心がつきかねる青苗に，柳おばさんのことを忘れたのか，という。

抗日戦争のとき，青苗の母は河北省東部で大部隊と移動中に青苗を生んだ。もえさかる火の海，銃砲のひびきのなかで，赤ん坊は道案内していた柳おばさんに預けられる。1948年に国民党の軍隊が解放区にはいってきて，地主の私兵の還郷隊は県委員会書記の息子である青苗をとらえようとする。柳おばさんは青苗を穴ぐらにかくし，拷問にかけられても口をきかず，家に火をかけられ，中に投げこまれて死ぬ。農民が命がけで守ってくれた子なのに，どうして農村へいかないのか，と父親からいわれて，青苗の心はきまる。

杜おじの娘，杜娟は青年団員で，杜おじの冷淡なのに気おちしている青苗をはげます。杜お

じは，早く羊飼いを養成して経験を伝えたいのだが，以前に親戚の子を預かったときのにがい経験がある。その子は中学の試験に受からず，羊飼い見習いに来たのだが，やる気がなく，文句ばかりいった末，杜おじに怒られて帰ってしまう。それから杜おじは，人から弟子をとることを勧められるたびにいう。

“现在的青年人跟咱们那会儿可不一样了。他们没有挨过饿，没有受过冻，不知道苦是啥味儿，这样的人哪里学得本事？咱再也不找这个病了。”（「いまどきの若いもんは，わしらの頃とはひどくかわってしもうた。飢えたこともなけりゃ，こごえたこともなし，苦しいことの味をしらん。こんなやつに，どうして技術を身につけられるもんか。わしゃもうこりごりじゃ。」）

青苗が中学までいった町の知識青年で，しかも専員さんの息子だと聞くと，杜おじは，そんな人がおれのいうとおりやれるわけがないときめこんでいたのである。

青苗はふらふらしながら羊の糞をかついだり，羊小屋を掃除したりなど，けんめいだが，羊の糞を人糞だめのほうにあけて，どなられたりする。しかし，青年団の支部会議で杜娟は，青苗にまだ知識階級の意識が残っていると指摘し，父との関係をよくするための意見をのべる。青苗は勇気をふるいおこし，羊の世話に精をだし，杜おじの身のまわりの世話にも気をつける。杜おじはしだいにこの若者を見直すようになる。

羊を山へつれていくとき，杜おじはわざと歩きにくい道をえらぶ。昼に西北の黒い雲をみて，暴風雨の来ることを察知した杜おじは，羊をほら穴に追いこむ。はげしい雨になるが，五，六匹の羊は中にはいれない。入り口の石の上に立ち，ずぶぬれになりながら雨具をひろげて羊を守ろうとする青苗の姿をみて，杜おじは感動する。その夜，足のマメの手当てをしている青苗に，杜おじは初めてやさしいことばをかけ，熱い煮こみうどんを娘に作らせて，一緒に家で食べるようにいう。青苗はやっと杜おじのテストに合格できたらしい。(57年11月７日，北京で執筆，≪中国青年≫に発表)

この作品で浩然は農村にはいった若い知識青年の姿を描く。1955年，『中国農村における社会主義の高まり』という本の編集の際，毛沢東主席が書いた評語の中でも，中学と高等小学校の卒業生を組織して協同化の仕事に参加させることにふれた文章を評して，「……これはとりわけ注目に価する。農村へはいってしごとのやれるこうした知識分子は，みな喜んでそこへいくべきである。農村は広びろとした天地であり，そこでは大いに力を発揮することができる。」[7]と述べ，また会計係の問題をとりあげた文章の評語では，「全国で協同化がすすめば，数百万の会計係が必要となるが，どこからさがしてくるのか。その実，人はいるのだ。おおぜいの高等小学校卒業生と初級中学卒業生を動員して，このしごとをやらせたらよい。問題は，かれらをすみやかに養成して，しごとのなかでその知識と技能の水準を高めることにある。」[8]と述べている。

こうして，「知識青年は農村へ」という運動が展開されていくのだが，都会に育った若者が農村に住みつくということは，そう簡単なことではなく，農村へ行ったものの，理想と現実とはあまりにもへだたりがあり，幻滅を感じて逃げ出そうとする者も多かったに違いない。若者にとっては生涯を決定する大問題に直面して，農村に行くかどうかに悩む青苗の姿が描かれたあと，決心して出かけたものの，予想に反して冷淡にあしらわれて苦しむ青苗の姿が描かれる。そうした青苗を，たえず励ますのが杜娟であり，青年団の仲間である。やがて，今どきの若い者は，と嘆いていた杜おじも，青苗がやる気のあるたのもしい若者であることを知って喜ぶことになる。

1958年の作品

≪苹果要熟了≫（りんごの熟すころ）

培紅は十八歳，高級中学の卒業生で，町から農村に来て半年になる娘である。これまで合作社の事務室で表や資料を書き，文書を扱ったりし，時には生産隊の生産や技術員の助手のしごとをしてきた。後山村に青年果樹隊ができると，彼女はそこに派遣されることになる。そこには母方の祖母もいる。

農業生産合作社に来たとき，なにも知らなかった培紅だが，この半年の間に合作社の仲間からたくさんのことを学び，今では理路整然と理論ものべるし，春の果樹の剪定でも一番に木にのぼるようになっている。技術員の黄輝はことごとに彼女をほめ，後山村では培紅が隊長になるだろうという。

培紅を迎えにきたのは芒種という武骨な若者で，小さいとき祖母の所へいったとき，この男にからかわれたことを培紅は思いだす。彼は八歳のときから地主の果樹園の世話をした男で，今では後山の果樹の専門家で，果樹隊の隊長だと主任に紹介され，培紅は気がめいってくる。

青年果樹隊の会合で，あまり学校にいっていない芒種は，どもりながら生産計画を発表する。培紅は彼の下で第三分隊の隊長になる。祖母の家に帰ると，芒種が水をかついで来てくれる。叔父が軍隊にいってからずっと何年も彼が水を運んでくれるのだと祖母はいい，芒種のことをほめる。

培紅が果樹の近くを掘って肥料をやっていると，芒種はもっと離れた所にまけといい，作業をやり直させようとする。紅培は怒っていうことをきかないが，あとで≪果樹栽培技術ハンドブック≫で調べると，芒種のいったとおりだ。培紅は彼の生産隊長としての能力はみとめるが，どうして自分に厳格な態度でのぞむのかとうらむ。

二人が青年団支部で批判され，自己批判してからは芒種の態度がかわって，おだやかに言いきかすようになる。リンゴが熟す季節になり，隊ではボルドー液を散布することになる。硫酸銅，石灰，噴霧器が準備され，薬を調合する責任者が決められる。責任者になれなかった培紅

は，書物や昔の記録を読んできて，薬を調合して，みなを驚かせようとする。芒種は薬がつよすぎるから石灰をまぜろというが，培紅はこの比率でよいと譲らない。

翌日，培紅の調合した薬をかけたりんごの木の葉が，くもの巣のようになり，りんごの実には黄色い斑点ができていた。技術員の黄輝は知っていたけれど，培紅に言いにくかったのだという。大雨でダムの様子を見にいっていた芒種は，帰るなり果樹園を見まわり，薬害は石灰乳で救えるという。培紅は芒種の作業を手伝うために，りんご園に駆けていく。(58年2月17日，北京で執筆，≪中国青年≫に発表)

書物からの知識だけで，実際経験のなかったために失敗した培紅に向って，書記の自香（女性）はいう。

“这回你该接受训了！不是我批评你，你身上的小资产阶级毛病不小哇！……人家芒种可哪一点不好哇，你总是对人家不满意？”(「今度こそあなたは教訓を受けないといけないわよ！わたしは批判するんじやないけれど，あなたの身についたプチブルの欠点は小さくないのよ！……あの芒種には，どこもわるいところはないのに，あなたはいつもあの人に不満をもっていたでしょう？」)

知識青年のおかしやすい欠点が指摘され，失敗を重ねるなかから，生産活動に従事する重要な意義を体得し，成長していく若者の姿が描かれる。培紅に気のある技術員の黄輝は，まちがいを見ても見ぬふりをするが，無骨な芒種の厳しい態度こそが自分を成長させてくれるものであったと培紅は気づく。芒種に反発しながら，一方ではつよい責任感をもつ，芒種の男らしい姿に心ひかれていく培紅の心理を，浩然はこの作品でみごとにとらえている。培紅がお下げ髪をうしろに揺らせ，胸をどきどきさせながら，大またにりんご園めざして駆けていく結末も巧みである。

≪石山柏≫（石山柏）

この物語は，「私」が県委員会から，摩天嶺に行って，小学校を創設する任務を与えられたところから始まる。摩天嶺は密雲県（北京から東北へ直線距離で約60キロ）の端の深山峡谷にあり，万里長城のすぐ南の山村で，古い地図にはのっていない。春の気配もまだ感じられない二月のことで，雪が山をおおい，氷が地を封じている。天をさえぎる大きな山があり，まがりくねってでこぼこのけわしい小道が山上に通じている。ここで私は，摩天嶺農業合作社主任の石山柏にあう。四十歳前後で，背の高い頑丈な体つきの人で，私は彼から，摩天嶺には昔から文字を読める人がなく，復員軍人の会計係が少し文字を知っているだけだが，今は社会主義建設をやるのだから，政治理論を学習し，科学技術を身につけることが要求されている，文字がよめないと，革命をやりとおせない，といった話をきく。

翌日の幹部会で村長は，教室や机やいすもなく，石炭も買えないと並べたて，政府が金を出してくれなければ，学校はつくれないという。何人かの幹部もため息をついている。

しかし，石山柏は，第一次五か年計画で金のいるときだから，国の援助をたのまず，なんとしても学校を始めようと主張し，自分の家を教室にし，黒板も自分でつくり，生徒募集に一軒ずつ回る。五日めに三十数人の生徒が集まり，学校は始まる。

やがて石山柏は，幹部や合作社員のための夜学も始める。記憶力のよくない彼は，苦労しながら字を覚え，秋がすぎるころには≪河北日報≫をつまりながらよみ，農業技術の小冊子もなんとか読めるようになる。翌年の春には，黒板新聞，新聞をよむグループ，劇団などがうまれ，石山柏は報告の原稿を書けるようになる。字典をひきながら園芸学の本を読みはじめ，通県からの帰りには，りんごやぶどうの苗をかっいで帰る。

私は新聞社の編集部のしごとをすることになって摩天嶺を離れる。それから五年，農学院の教授たちで編成された視察団とともに，寒冷地帯で今までみられなかった多くの果樹を栽培することに成功した摩天嶺農業合作社を再び訪ねることになる。(58年5月22日，北京で執筆，≪長春≫に発表)

主人公の石山柏は，自然条件のきびしい北方の山村に育ち，戦争中の苦しい生活の折にもその土地を離れようとせず，解放後は村で最初に入党し，十四，五年も村の支部書記をつとめる男である。彼は困難を恐れず，山村の生活を向上させようと，学校をつくり，夜学を始め，自分も文字を覚えようとする。文字が覚えにくくて悩んだ彼が工夫した方法は，大きな紙に桌，柜，門などの字を書いてもらって，それを机（桌）や戸棚（柜）や入り口（門）に貼りつけることだった。学校へ行くこともできず，勉強できなかった人の，漢字を覚えようとする執念を感じさせるエピソードである。しかも，そうして身につけた知識は，すぐにしごとと結びつき，生産と結びつく。新中国の山村や農村では，このような‘石山柏’が数多く生まれ，人びとのために働くことによって，しっかりと村のくらしを支えているのであろう。

浩然の作品には，山村や農村を「私」が訪問してその土地に生まれた新しい人間像を描きだすといった形をとることが多いが，浩然自身が地方新聞の通信記者などをしていた時期があり，このときの経験が彼の創作の豊かな土壌となっている。またその「私」は，しばしば“梁さん”と呼ばれるが，浩然の本名が梁金広であることからであろう。また，彼の作品によく名の出てくる薊県（河北省）こそは，彼の故郷であり，彼は1932年に薊県の貧しい農民の家に生まれ，十歳で両親を失い，一つちがいの姉とともに苦しい少年時代を送った人である。[9]

1959年の作品

≪泉水清清≫（泉の水はながれる）

響水鋪は鉄鎖崖という山の前にあり，水の便がわるい所である。川はあるが一年のうち九か月は干上がってしまう。冬や春の水のない時期には，十五里（7.5キロ）も離れた乱石原から馬で水をはこばねばならない。

王全礼は隣村の人間だが，鉄鎖崖人民公社ができてからは，公社の副主任となり，響水鋪の工作責任者となった。劉炳志は響水鋪の大隊長で，二人は今までよく協力してきたが，水のことで具合がわるくなってくる。

王全礼は人民公社の力で，三つの機械井戸を掘ることを提案するが，劉炳志は乱石泉から水をひくほうがよいという。54年にも用水路をひいたが失敗していた。劉炳志は，あれは合作社の時代で，人の力も足りず，ほかの合作社の土地は用水路を通せないために，回りみちをして掘らなければならなかった。今は人民公社になって，人の力も大きくなり，土地もつながっているから大丈夫だという。委員会では，用水路建設案がとおり，県の水利科からも技術員が派遣されて測量をたすけ，他の作業区からの支援もあって用水路は完成する。さらに二百畝（1ムーは6,667アール）の水田がひらかれ，劉炳志は県委員会から表彰される。

その後，公社は響水鋪に食糧加工工場をつくることを決め，二人にこの任務を与える。王全礼はここで腕をみせてやろうとひそかに考え，県城までいって，展覧会に出品されていたディーゼルエンジンをまわしてもらうことにしたが，劉炳志はここでは水力を使うことにして，エンジンはほかの公社にまわしてやるほうがいいと主張し，この案がとおる。

劉炳志が半月もかかって作りあげた水車式の機械では，水車が途中でとまってしまう。水流の力がよわいためだと知った劉炳志は，鉄鎖崖の上の黒竜潭という洞穴を探険して，そこから水をひこうとする。危険をおかして洞穴の底へ降りていった劉炳志は，遂に水脈を発見する。近くの公社も石工を送って支援し，山をくりぬき崖をひらく工事が始まる。泉の水が峡谷から加工工場まで流れてくる日に，劉炳志にはじめての赤ん坊がうまれる。彼はその子に“泉水”という名をつける。(59年2月19日，北京で執筆，≪長江文芸≫に発表)

この作品で浩然は，人民公社成立直後の水利施設建設問題をとりあげ，これに黒竜潭という伝説に包まれた洞穴探険のロマンや，二人の幹部の対立の問題などをからませて，やや長い28ページの短編にしあげている。この作品の書かれた前年の1858年8月29日の中国共産党中央委員会政治局拡大会議では，「農村に人民公社をつくる問題についての 中国共産党中央委員会の決議」を出しており，12月10日の第八期中央委員会第六回総会では「人民公社の若干の問題に関する決議」が出されるが，この作品はこうした情勢をふまえて，人民公社の優越性をたたえるものではあるが，上述したような他の要素もからませて，平板におちいらぬ配慮をしている。公社幹部の対立問題では，体面を重んじる小心な副主任の敗北が語られるが，こうした人物は革命前に比較的裕福な家庭に生まれ，教育も受けた人で，解放後もうまくたちまわって，村の

指導者的地位についているのであるが，革命を経て鍛えられた若い幹部と対立することになる。こうした幹部の対立は，二つの路線の闘争に発展し，これが数年後に発表される浩然の長編小説≪艶陽天≫や≪金光大道≫の重要なテーマとなるのである。

≪箭杆河辺≫（箭杆河のほとり）

これは人民公社が成立した最初の年の物語である。各生産隊は百里（50キロ）離れた密雲ダムの建設に出かけていたが，秋深いある夜，激しい雨になる。副隊長の徐広泰はあわてる。箭杆河の水かさが増してくるのに，村には二十人ほどの男しか残っていない。婦人もまじえて五十人の男女が集められ，党委員会からはほかの村から支援隊を送るといってくる。

大隊長も支部書記もダム建設に出ていて，全責任を負う徐広泰のところへ，やっと来てくれた支援隊は女ばかりだった。五十五人の女をつれてきたのは範新春だった。

徐広泰は四十一歳，土地革命のときこの村に住みつき，七，八歳から十数年間，地主のところで働いた。父親は早く死に，めくらの母親と二人ぐらしで，彼が二十歳のとき，地主から借金して，飢饉で逃げてきた娘を買って嫁にする。その翌年，洪水にあい，徐家では三日も飯がたけず，四日めに嫁は泣きながら，おなかの子どものために，それぞれが生きていく道をさがそうと言い，翌日，徐広泰がとめるのもきかずに出ていく。七日めに母親は死に，彼は唯一の財産である土の家を売って，結婚のときの借金を払い，それからはあちこちで働いて十数年をすごす。

土地改革のとき，たまたま村の西の廟に住んでいた彼に，村の幹部は土地と二間の瓦ぶきの家を分けてくれる。まじめで働き者の彼に，村人は嫁をもらえと勧めるが，そのたびに彼はあの女をめとっていなければ，借金もせず，母親を死なせたり家を売ったりすることもなく，ルンペン生活をせずにすみ，胸に氷遠にいやすことのできぬ傷もできなかったのにと，いつも思うのだった。

訴苦会（昔受けた苦痛を訴えあう大衆集会）で，彼がこのことを皆に訴えたとき，土地改革工作組の同志はこういって彼をさとす。

“老徐，你把根子找错了，是谁让你家败人亡、受了十几年的苦罪呀？是旧社会，是封建地主，是万恶的私有制！这些不仅害了你，你那个女人也是受害的人哪！”（「徐さん，あんたは原因をまちがえている，あんたの一家を離散させ，十何年も苦しませたのは誰なのか！古い社会であり，封建地主であり，憎むべき私有制だ！これらは，あんたをひどいめにあわせただけでなく，あんたのその嫁さんもひどいめにあった人なんだよ！」）

彼にもしだいにその理くつはわかってきたが，女に対してはやはり妙なわだかまりがあり，ひどい女ぎらいになってしまう。

54年に農業合作社に参加してくらしがよくなり，翌年，高級合作社になると，労働力による

分配となり，食糧のたくわえや貯金もできるようになると，自分から嫁の世話を人にたのむようになる。

範という三十五歳の女性で夫と死にわかれて一年あまりの人を勧められ，彼女も貧農出身で，まじめで働き者と聞いて，徐広泰の心はうごく。二人は何回か会い，話はまとまりそうになるが，彼女の家に行ってみると三人の子どもと，母親までいるとわかって彼はためらう。とても五人は養えまいと思ったのだが，この話が先方に伝わると，彼女は泣きながら，もうどこへも嫁にはいかぬという。徐広泰は後悔したものの，先方へあやまりにもいかず，それからは嫁をもらう話もなくなってしまう。

その女性が範新春で，いま彼の前に現れたのである。以前は首をたれて低い声でぼそぼそ話をしていた若後家が，今は快活な女性幹部で，わたしは範新春だと名のる。

彼女も苦しい運命の道をたどった女だった。彼女が母親のおなかの中にいたとき，父が死亡し，母親は彼女をうんだあと，三人の女の子をかかえて生活は苦しく，再婚話も三人の子もちということでつぶれる。子どもひとりだけならという男がいて，母親は泣く泣く上の二人の子を売り，彼女だけをつれて再婚するが，娘のことで夫からも親類からも冷たく扱われ，範新春は十一歳になると，箭杆河のほとりの村に童養媳（息子の嫁にするために幼いときからもらって育てる女の子）にいく。夫は二十歳も年上で，この小さい嫁をきらって撫順へ石炭掘りに行ってしまい，土地改革の翌年にやっと家に帰ってくる。何年かして三番めの娘が生まれたとき，夫は病死し，それから徐広泰との話があったのである。

徐広泰が子どものことで考えをかえたと知っても，彼女は弱みを示さなかった。人民公社ができて，子どもを幼稚園に預けて働いている。

翌日，雨はやむが，山から流れてくる水はいつ堤防を破壊するかわからない。水かさは刻々とましていく。深夜になって，土運びの人びとも疲れる。範新春はダムから帰った人の話を思いだし，ろくろで土を堤防の上に運びあげる方法を考えつく。

三日間に五回，大水が押しよせるが，堤防は遂に守られる。支援の人びとをつれて帰ろうとする範新春を徐広泰はあわててひきとめ，「あのときはわしがまちがっていた，すまない」という。帰りみち，彼女は無限に広がる大地，みのった作物，色づいた果実をながめながら思う。

她在人生所经历的一切都象河里那环环跳跃的波纹，一下子浮在她的眼前，多么曲折、多么艰险的人生呀！不是赶上如今这个新时代，不是有了人民公社，自己将要走到哪一条路上去了呢！

（彼女が人生で経験してきたあらゆることが，河の中でぐるぐるうず巻いている波紋のように，急に彼女の目の前に浮かんできた。なんと曲りくねった，なんと困難な人生だったろう！このような新しい時代に出あえなかったら，人民公社がなかったら，自分はどんな道を歩もうとしていたことだろう！）（59年3月9日，北京で執筆，≪文芸紅旗≫に発表）

まじめで働き者の徐広泰が女性恐怖症となり，結婚を恐れたのは，旧社会での悲しい経験からであり，三人の子どものために再婚できなかった範新春も，旧社会での苦しみを背負った女性である。範新春に生きる希望を与えたのは，新しい時代の到来であり，人民公社の成立であった。新しい時代の女性としてたくましく成長した彼女の姿を見た徐広泰の胸にも，新しい希望がわいてくる。この小説の最後の部分で，範新春はいう。

“过去是嫁汉嫁汉，穿衣吃饭，找男人无非是为了吃碗现成的饱饭，当然谈不上别的，只要给饭吃就行了，这样配成的夫妻，日子能美满吗？”（「昔は嫁入するのは身をよせる所をさがすため，夫をさがすのはおなかいっぱい食べさせてもらうためでしたから，当然ほかのことは話にならず，ごはんを食べさせてもらえばそれでよかった。こんな夫婦で，すばらしいくらしが送れるでしょうか？」）

魯迅の「祝福」や，巴金の「家」に出てきた中国の悲惨な女の一生が，ふたたびくり返されることはもうない。あのがんじがらめに女性を縛りつけていた絆は今や断ち切られ，中国の女性は新しい道を歩みはじめた。人民公社の成立は，すべての女性に働く場所を与え，それが女性の解放をもたらしたことを，浩然はこの作品で描きだした。女性が真にめざめ，男性とともに社会に出て働き，たくましく成長することによって，男性に従属せぬ女性が誕生する。男女同権を叫ぶばかりでは，現実はかわるものではない。これは，土地改革と人民公社成立を背景に，明るくうたいあげられた農村女性解放のものがたりである。

≪并蒂莲≫（仲のよい夫婦）

并蒂莲は，ひとつの茎に二つの花が咲く蓮で，夫婦仲のよいことにたとえる。「私」は紅寨村人民公社の秋のとりいれ情況をみるため，王家園子に三日間とまるが，このとき知りあった若い夫婦が，この短編の主人公である。

人民公社では，党委員会が開かれ，各大隊の秋のとりいれ計画が話合われていたが，王家園子大隊の計画案は通せないと主張した二十五，六歳の婦人がいた。支出の一万円はもっと節約して，麦の植えつけにまわせるというこの女性が，副主任の董春桃で，私は彼女から，初級合作社のときから主任をしている彭興漢が，公社成立後はみえをはるようになり，昔の地味なやりかたをしなくなったという話をきく。彼女の家に案内され，壁に貼られた并蒂蓮の水彩画が，彭興漢と董春桃の結婚記念に贈られたものと知って，私は驚く。二人は仲のよい夫婦であった。

幹部と党員の会の席上で，計画が通らなかったことを知った彭興漢は怒りだすが，董春桃は，人びとと相談もせずに多額の支出をしようとするところに問題がある，総路線の方針に沿い，経費を節約すべきで，ゴム輪の車を買う件にしても，大工の彭は古い車を修理すれば使えるといっている，と主張する。

夜，家に帰ってからも，この若い夫婦は議論をつづける。董春桃は，人民公社の成立は共産

主義実現のための第一歩にすぎず，革命をやりとげるための努力をあなたは忘れている，という。妻の父親は区委員会書記で，彼女は父から教育され，入党も早く，思想水準も自分より高いと認めている彭興漢であるが，今度のことでは妻の意見を認めようとしない。

翌日，彭興漢は井戸掘りの陣頭指揮をし，董春桃はほかの村へ出かけ，大工に来てもらって車を修理する手配をする。昼には人びとが集まり，とりいれ準備の意見を出し合い，穀物にかぶせる葦のアンペラも買わずに，藁で編んで代用することになる。彭興漢も自分の誤りを認めたらしく，明るい顔で董春桃と話し合っている。(59年4月12日，北京で執筆，≪長江文芸≫に発表)

若い夫婦が人民公社の幹部であり，妻のほうが夫をリードしながら，公社の活動を進めていくさまを描いた，ちょっと風変わりな作品である。こうした夫婦のあり方も，以前にはとても考えられなかったものである。

「ゆうべもまた二人でひどいけんかをしたんでしょう」とたずねられて，くつくつ笑いながら答える董春桃のことばは，新しい時代におけるこの若い夫婦の生きかたを示すものとして興味深い。

"我们俩不会吵翻的。你来的时间长了就会知道，我们俩每天离开争论，就没法过日子。我们为什么争论，心里都清楚，所以越争论，越团结。"(「わたしらふたりがけんかなんかするものですか。あなたが長くいてくださったら，きっとわかってもらえますけれど，わたしらふたりは，毎日討論しないでは，くらしていけないんですよ。わたしたち，なんのために討論するのか，どちらもよくわかってますから，討論すればするほど，団結するんです。」)

≪月照东墙≫(月は東の壁を照らす)

尚おばさんの娘，愛君は青年突撃隊に参加して，半月前から北山の緑化運動に出かけている。夫の尚友は生産隊長で，春の耕作の指導に忙しい。

先余の嫁が難産だというので，尚友は担架で病院へかついでいくが，愛君の嫁入りのために布を買う金までもっていこうとする。去年，人民公社が成立して，隊長にえらばれてから，尚友は家のことは放りっぱなしで社員の世話にかけまわり，尚おばさんにも文句をいうようになった。年をとった夫が，このままでは体をこわしてしまうのではないかと，尚おばさんは心配する。

夕食の準備をして待っているのに，帰った夫は，家へも寄らずに飼育場へ行ってしまい，久しぶりに帰ってきた娘も，みんなの靴をとりに帰ったのだと，水をのむなり出かけようとする。夜おそく帰ってきた夫は，飼育係の新婚の嫁が里から戻ったから，かわりに家畜を見にいってやると，また出かけていく。

飼育場では，尚友と娘とが，集めてきた布靴をつくろっていた。心配してみにきた尚おばさ

んは，夫が娘に，入党を許可されたと告げているのを聞く。尚おばさんはこっそりと家に帰っていく。「あの人がみんなのことばかり考え，しごとのことばかり考えて，休もうとしないと思ったら，党の人間になっていたんだった！」とつぶやきながら。(59年6月20日，北京で執筆)

夫と娘が人民公社のしごとに没頭し，家のことをかまってくれないのに不満な尚おばさんが，しだいに二人を理解していく過程を描くこの作品は，浩然の他の作品にくらべて，もうひとつ迫力がない。入党のことを娘に告げるのを妻が聞くという場面の設定も不自然である。9ページという短いもので，ストーリーも単純であり，軽く流して書かれた感じがする。

≪亲家≫（親戚）

嫁にやった娘の姑の誕生日だというので，荷花の母親は休みをとって出かける。彼女は五十歳の働きもので，秋のとりいれの忙しい最中に出かけようとしたのには理由がある。

吉素村は香果峪と同じ人民公社にはいっているが，間に山があってまだ行ったことがない。荷花は，吉素村の桂元と恋愛結婚をしたのだが，家のことは調べなかった。新時代の結婚は，二人の気があっていればよいと考えたからだが，娘がどんなくらしをしているのかは気になっている。

もう一つの理由は，一か月めの里帰りのとき，荷花はむこうの家族が仲よく積極的に働いていることを告げ，とくに姑をひどくほめたのが気になっているからである。姑は荷花の母親より進歩しているといわんばかりの口ぶりだったのが，勝気な彼女には気にいらない。

荷花の母親は，その姑に出会ったことがある。十何年前，日本軍がいたころのことで，ひでりで薊県の町へ逃げてきた姑は，未亡人で，何人も子どもをつれ，疲れと飢えで泣いていた。荷花の母親はたべものが手にはいるといつもすこし分けてやった。二度めに会ったのは1947年の冬，土地改革が終わったあと，国民党反動派が冀東解放地区へ攻めてきたときのことで，区公所へ負傷者の慰問に行ったときだった。桂元を解放軍に入れてもらおうとして来ていた。当時の印象では，姑はよわよわしく無能な女だったのに，娘がこんなにほめるのが納得できない。

吉素村につくと，広場におちた穀物を掃きとって袋に入れていたのが，荷花の姑だった。袋を背負って自分のうちへもって帰るのを見て，おどろくが，遠慮して口には出さない。

夕方になって，誕生祝いの会が始まり，食事のあと，この一か月の家族の批評会になる。荷花の働きが一番だといわれて，母親は喜ぶが，夫の桂元が口をはさみ，荷花のしごとぶりを批判する。豆を運ぶにも，回数ばかり考えて，途中でたくさん豆をおとしている。やはり姑が一番で，とくに集団のことを考えている。昼休みもせず，広場や道におちた豆をひろい，会計係の計算では秋のあいだに合計四百六十七斤もの穀物を隊に出した，というのである。

夜，月明りの下で，石臼を押して粉をひく姑の姿をみて，荷花の母親はまた驚く。二人は力を合わせて臼をまわす。姑が四十年まわしてきたこの石臼も，来年の春にはダムが完成し，発電所ができるので，いらなくなってしまうのだそうだ。(59年11月1日，北京で執筆，≪解放軍文芸≫に発表)

長い苦難の日々を生き抜いてきた中国の女性が，年老いてからも，みんなの役に立つしごとをしようと励み，若い世代はそれに見習おうとするものがたりである。娘を嫁にやった勝気な母親には，娘も自分も人にはひけをとらぬ自負があるだけに，よわよわしげな印象しかない先方の姑に，はげしい対抗心をもやすという設定はおもしろく，浩然の物語作者としての才能を示すものである。

このあとで書かれる作品の中にも，第一印象はよくない人物であったのに，やがてそのすばらしさを発見して感動するという運びかたのものが多いが，この作品もその一つである。夜ふけに石臼を押して粉をひく姑をみた場面は，魯迅の「一件小事」の情景描写を思い出させる。……，这个十几年来，在自己心目中一直是个瘦小，软弱的女人，一下子高大起来，甚至于觉得她身上放出耀眼的光芒。(この十何年来，自分の心の中では，やせ細ったよわよわしい女だとずっとおもっていた人が，急に大きくなってきて，そのからだからきらきらと光を放っているようにさえ感じられた。)

— 4 —

以上，1956年から1959年にかけて書かれた浩然の作品の中から，いくつかを選んで書いてきた。この時期は，ちょうど人民公社成立の前後の時期にあたり，農村社会は社会主義化をめざして大きく揺れ動いていた。文芸界でも，秦兆陽，丁玲，徐懋庸といった人びとが相ついで批判され，また「典型問題」論争や「社会主義リアリズム」論争がはじまって，文芸路線をめぐる右派攻撃が盛んに行なわれた時期であった。

こうした時期に浩然は，中国の北方農村を舞台に，新しい時代をつくりだすために努力するさまざまな人間像を描きだす数多くの短編を発表していった。折にふれて語られる過去の農民の生活は，まことに悽惨なものであり，人間として生きることのできなかった苦しみを訴えるものである。このことを抜きにして，現代中国を論ずることはできない。さまざまな矛盾をもはらみつつ，激しく揺れ動いていく中国の社会で，人びとがどのように生きているかを，浩然の作品のなかから知りたいというのが，この小論でめざしたものであり，さらにこれにつづく作品についても，こうした試みをしていきいと思う。[10]

(1977, 10, 6)

註

1) ≪彩霞集≫（中国青年出版社，1963年12月）の編后記による。
2) 以上挙げたほかに≪七月槐花香≫（天津人民出版社，73年4月），≪老支書的伝聞≫（北京人民出版社，73年7月）等があるというが，未見。
3) 「浩然の小説」（『小川教授入矢教授退休記念中国語学文学論集』）
「普通話と北方語彙――浩然の作品を中心として――」（追手門学院大学文学部紀要9）
「中国の小説にみる階級闘争の諸相――浩然『艶陽天』の場合――」（アジア・クォータリー，76，10～12月）
4) 杉野明夫「人民公社」（『講座現代中国Ⅲ』，37p，大修館書店）
5) これらの公社史は竹内実編『中国現代文学選集18，記録文学集』（のちに『中国の革命と文学11，人民公社史）』いずれも平凡社刊で見ることができる。
6) 杉村武「人間・文化・解放」（『講座中国3』218～19p.，筑摩書房）
7) 「一つの郷で協同化の計画をたてる経験」という文章の評語（『中国農村における社会主義の高まり』の評語，≪毛沢東選集第五巻≫247p.）
8) 「農業生産合作社，購買販売合作社，信用合作社の会計係で会計互助網をつくった経験」という文章の評語（同上，254p.）
9) 浩然の経歴については，浩然「仕合せな生活と執筆」（雑誌≪人民中国≫72年5月号）や，“Introducing the Writer Hao Jan”（≪CHINESE LITERATURE≫74年4月号）などによって知ることができる。
10) 浩然の作品については『咿唖』第7号に，刈間文雄・安本実共編「浩然作品目録及び浩然関係資料（初稿）」があり，現在知り得るかぎりの作品と関係資料について整理されている。